

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
(1) うんしゅう みかんの着 果対策	(今月の作業のポイント) ○うんしゅうみかんの着果対策 ○中晩柑類の着果管理 ○キウイフルーツの摘果 ○キウイフルーツかいよう病への対策 ○夏肥の施用 ○病虫害防除 1 か月予報（5月15日高松地方気象台発表）では、気温がかなり高くなる見込みであり、平年に比べ曇りや雨の日が多い予報である。気象状況を確認し、今後の着果管理を行う。 ア 着果量の多い樹 （ア）あら摘果 着果の多い樹では、早期に着果負担を軽減し、新梢を発生させ、来年の結果母枝を確保することが重要となるため一次落果が終わり次第作業を行う。6月下旬から傷果や奇形果を中心に摘果を行い、7月上旬頃までに終わらせる。 （イ）摘果剤の有効利用 着果量が多く、摘果する労力がない場合は、摘果剤を利用する。 フィガロン乳剤を使って部位別に全摘果を行うには、満開 10～20 日後の生理落果最盛期に 1,000 倍を摘果したい部位へ散布する。また、間引き摘果を目的とする場合は、満開 20～50 日後に 1,000～2,000 倍を全面に散布する。 ターム水溶剤を使って部位別に全摘果を行う場合は、満開 10～20 日後に 500～1,000 倍を摘果したい部位へ散布し、間引き摘果を行う場合は、満開 20～40 日後に 1,000～1,500 倍を全面に散布する。 両剤とも散布時の気温によって効果の発現が異なる。25℃付近では効果が安定するが、それ以上では過摘果になることがあるので、間引き摘果の場合は注意が必要である。 また、フィガロン乳剤は根の生育を弱めて樹勢を衰弱させることがあるので、連年での使用は避ける。ターム水溶剤は、根への移行はほとんどみられないため、樹勢への影響は少ないと考えられるが、芽の伸長を停止させる効果もあることから、樹勢をよく観察して使用する。

項 目	作 業 内 容
(2) 中晩柑類の 着果管理	イ 着果量の少ない樹 新梢と幼果の養分競合や多雨・日照不足・高温等の影響により生理落果が助長される。着果量を確保するため着果部位周辺の強い新梢の芽かきや、かぶさり枝を除去し、養分競合の防止や樹冠内部への受光環境の改善を行い、結実率を高める。 ア いよかん 着果過多樹や樹勢衰弱樹では、一次落果終了後(6月下旬頃)からあら摘果を行う。あら摘果の目安は、葉果比 50～60 程度で7月中には終わらせる。直花果、奇形果、傷果、内なり果、極小果、遅れ花果等を摘果する。 イ 不知火 着果量が多い場合、樹勢の低下や小玉果の増加に加え、隔年結果を助長するため、6月中旬から下旬までに全摘果量の8割程度を目標にあら摘果を行い、奇形果、直花果、偏平果、傷果等を除去する。あら摘果を行うことにより果実肥大が促進されるほか、夏芽を発生させることで細根が発生し減酸しやすくなる。 ウ セとか 収穫時期が3月と遅いため樹に負担がかかりやすい。着果量が多い場合、さらに樹勢が低下し隔年結果性が強まる。このため、生理落果終了後できるだけ早期に葉果比 60 程度まで摘果し、夏芽を発生させ樹勢低下を防ぐ。 エ 愛媛果試第 28 号 葉果比が60程度となるように6月下旬から7月上旬にあら摘果を行い夏芽の発生を促す。直花果や短い有葉果、内なり果、裾なり果を摘果し、葉5枚以上の有葉果を残す。 オ 甘平 夏秋期に裂果しやすいため20～30%の裂果を想定した着果管理を行う。あら摘果では葉果比60を目安として、極小果、奇形果等を中心に摘果を行う。
(3) キウイフル ーツの摘果	代表的な品種であるヘイワードの果実は、7月中旬頃までに収穫時点の果実径の70～80%まで肥大する。特に、細胞数が劇的に増加する受粉後30日間は、不要な果実を早期に摘果し、残す果実の初期肥大を促進させることが重要である。着果量は1 m²当たり25～30果を目安とする。

項 目	作 業 内 容																																																																																																
(4) キウイフルーツかいよう病への対策	かいよう病の拡散防止のため、園地の見回りによって、本病による枝枯れや樹液漏出痕の早期発見に努める。発病を確認すれば発病程度に応じ適切に伐採や切除を行う。薬剤防除に当たっては、コサイド3000 2,000倍（使用時期:収穫後～果実肥大期、薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤200倍を加用）、アグレプト水和剤 1,000倍（使用時期:収穫90日前まで4回以内）、マイシン20水和剤 1,000倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）、またはカスミン液剤 400倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）などを散布する。耐性菌出現の恐れがあるため、同一FRACコードの抗生物質剤の連用は避ける。																																																																																																
(5) 夏肥の施用	6月は地温が上昇し、根の活性とともに肥料の吸収効率も高まる。夏肥を施用して新梢の充実や幼果の肥大を促す（下表参照）。 表 愛媛県施肥基準 <table><tr><th colspan="2" rowspan="2">品種名</th><th rowspan="2">目標収量 (t/10a)</th><th rowspan="2">施肥時期</th><th colspan="3">施肥成分量 (kg/10a)</th></tr><tr><th>窒素</th><th>リン酸</th><th>カリ</th></tr><tr><td rowspan="8">かんきつ類</td><td>宮内伊予柑</td><td>4</td><td>6月下旬</td><td>9</td><td>7</td><td>8</td></tr><tr><td>不知火</td><td>3</td><td>6月下旬</td><td>8</td><td>6</td><td>7</td></tr><tr><td>ぽんかん</td><td>3</td><td>6月下旬</td><td>8</td><td>6</td><td>7</td></tr><tr><td>清見</td><td>3.5</td><td>6月下旬</td><td>9</td><td>7</td><td>7</td></tr><tr><td>河内晩柑</td><td>6.5</td><td>6月下旬</td><td>9</td><td>6</td><td>7</td></tr><tr><td>せとか</td><td>3.5</td><td>6月下旬</td><td>9</td><td>7</td><td>7</td></tr><tr><td>愛媛県試第28号</td><td>4</td><td>6月上旬</td><td>10</td><td>7</td><td>8</td></tr><tr><td>甘平</td><td>3.5</td><td>6月下旬</td><td>9</td><td>7</td><td>7</td></tr><tr><td rowspan="6">落葉果樹</td><td>かき</td><td>3</td><td>6月下旬</td><td>6</td><td>3</td><td>6</td></tr><tr><td>キウイフルーツ</td><td>2.5</td><td>6月下旬</td><td>4</td><td>4</td><td>5</td></tr><tr><td>くり</td><td>0.4</td><td>6月下旬</td><td>4</td><td>2</td><td>5</td></tr><tr><td>なし</td><td>3</td><td>6月上旬</td><td>3</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>もも</td><td>2</td><td>6月上旬</td><td>3</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>ブルーベリー</td><td>2</td><td>6月中旬</td><td>4.2</td><td>3</td><td>3.6</td></tr></table>	品種名		目標収量 (t/10a)	施肥時期	施肥成分量 (kg/10a)			窒素	リン酸	カリ	かんきつ類	宮内伊予柑	4	6月下旬	9	7	8	不知火	3	6月下旬	8	6	7	ぽんかん	3	6月下旬	8	6	7	清見	3.5	6月下旬	9	7	7	河内晩柑	6.5	6月下旬	9	6	7	せとか	3.5	6月下旬	9	7	7	愛媛県試第28号	4	6月上旬	10	7	8	甘平	3.5	6月下旬	9	7	7	落葉果樹	かき	3	6月下旬	6	3	6	キウイフルーツ	2.5	6月下旬	4	4	5	くり	0.4	6月下旬	4	2	5	なし	3	6月上旬	3	2	3	もも	2	6月上旬	3	2	3	ブルーベリー	2	6月中旬	4.2	3	3.6
品種名						目標収量 (t/10a)	施肥時期	施肥成分量 (kg/10a)																																																																																									
		窒素	リン酸	カリ																																																																																													
かんきつ類	宮内伊予柑	4	6月下旬	9	7	8																																																																																											
	不知火	3	6月下旬	8	6	7																																																																																											
	ぽんかん	3	6月下旬	8	6	7																																																																																											
	清見	3.5	6月下旬	9	7	7																																																																																											
	河内晩柑	6.5	6月下旬	9	6	7																																																																																											
	せとか	3.5	6月下旬	9	7	7																																																																																											
	愛媛県試第28号	4	6月上旬	10	7	8																																																																																											
	甘平	3.5	6月下旬	9	7	7																																																																																											
落葉果樹	かき	3	6月下旬	6	3	6																																																																																											
	キウイフルーツ	2.5	6月下旬	4	4	5																																																																																											
	くり	0.4	6月下旬	4	2	5																																																																																											
	なし	3	6月上旬	3	2	3																																																																																											
	もも	2	6月上旬	3	2	3																																																																																											
	ブルーベリー	2	6月中旬	4.2	3	3.6																																																																																											
(6) 病害虫防除	【かんきつ】 ア かいよう病 強風にさらされると傷がつき、病菌の侵入が容易になることから、発病が著しく増加する傾向にある。また、梅雨期は菌の増殖に好適な時期であり、特に前年に発病した園では5月下旬～6月上旬にIC ボルドー66D 80倍（使用時期:一、散布回数：一）を散布し、罹病枝葉の除去や防風対策を徹底する。																																																																																																

項 目	作 業 内 容
	イ 黒点病 本病は果実の外観品質を低下させる。降雨の多い梅雨期は感染が多くなるため、ジマンダイセン水和剤 600 倍（使用時期：うんしゅうみかんを除くかんきつ類は 90 日前まで、うんしゅうみかんは 30 日前まで 4 回以内）を散布する。200～250mm の降雨または 30 日以内が次回の散布目安となるが、本病に弱いせとかなどでは、150～180mm の降雨または 25 日以内と短くする。また、枯れ枝が伝染源であるので除去に努める。 【落葉果樹】 ア キウイフルーツ果実軟腐病 枯れ枝等に存在する病原菌が生育期間中の果実に潜伏感染しており、主に貯蔵中に発病する。病原菌は降雨で飛散し、梅雨期は主要な感染時期であることから、アリエッティ水和剤 600 倍（使用時期：幼果期まで（但し、収穫 120 日前まで）2 回以内）やベルクト水和剤 1,000 倍（使用時期：収穫前日まで 5 回以内）などを散布する。 その他、カキの炭疽病や落葉病、ブドウの黒とう病、晩腐病、べと病、モモの黒星病、灰星病などは、降雨や多湿が発生に助長的であるため予防散布を実施する。

（作成：果樹研究センター）